

## 関連学会印象記

# 第14回日本心血管インターベンション学会学術集会

河 口 廉\*

第14回日本心血管インターベンション学会学術集会は帝京大学医学部附属病院循環器科の一角高明教授を会長として平成17年6月16日から平成17年6月18日の3日間、東京都渋谷区のセルリアンタワー東急ホテルにて開催された。本学術集会での話題の中心はやはり、昨年8月より日本でも使用可能となった薬剤溶出性ステントであった。

一般演題では各施設における薬剤溶出性ステントの使用状況、初期成績および遠隔期成績の一部が多く提示されており、従来のベアメタルステントに比較し明らかなPCIの成績の向上と適応の拡大が実感された。さらに、これまで我々が数字でしか見ることの出来なかった海外の大規模スタディーと同様の結果が、日本の臨床の場でも証明される結果となっていた。しかしながら、日本ではステント留置に際しての標準併用薬であるクロピドグレルが未承認であり、より副作用の頻度の高いチクロピジンを用いなければならないこと、また、ステント自体の使用に対する適応の承認が、現在の臨床と大きくかけ離れているための適応外使用が高率であることなど、日本特有の問題が残されており今後早期に解決すべき課題と思われた。さらに、最近、報告が散見される遅発性のステント血栓症の危険性についての指摘もなされており、また、抗血小板剤をいつまで継続すべきかに関しては、明確な答えはでていなかった。そのような現状を踏まえ、薬剤溶出性ステントの使用を慎重に考慮すべきとの意見も少なからず聞かれた。

薬剤溶出性ステントの他にもパネルディスカッションでは“日本から世界へ：がんばれ日本”と題して、現在日本のインターベンション界におけるデバイスの認可の遅さやエビデンスの足りなさな

どについて各先生から現状や問題などがディスカッションされた。

また、特別プログラムとして“PCI認定医・専門医のあるべき姿：学会認定医制度の統合へ向け”と題し日本心血管インターベンション学会、日本心血管治療学会、冠疾患学会、および、日本専門医認定機構、一般市民のそれぞれの立場からの講演があり、現在の認定医制度の欠点が明確に指摘された。また、一方で現状での認定制度作りの困難さも浮き彫りとされた。特に心臓カテーテル検査、治療は致命的あるいは恒久的後遺症を残す医療事故の発生しやすい手技であり、高度の知識のみならず洗練された手技が求められる。その為、中立的第三者にも認められる認定医制度である絶対的な必要性があり、その制度作りに際し今後、日本心血管インターベンション学会、日本心血管治療学会、冠疾患学会の三学会が統合、前向きに話し合いを行っていく方針が打ち出された。

その他、ファイヤーサイドセミナー等では、慢性完全閉塞病変に対するガイドワイヤーの選択、操作法、分岐部病変に対する様々なステント留置法やその使い分け、その他のデバイスの工夫した使用法など、本学会ならではの実際の詳細な手技に関する多くの講演が企画され、日常の冠動脈インターベンションに関する知識の分配と全体の技術向上に大きく貢献するものであったと思われる。

最終日には三井記念病院と湘南鎌倉総合病院からのインターベンションライブ中継が行われた。ほとんどの症例において薬剤溶出性ステントが用いられ、分岐部病変、左主幹部病変等の難易度の高い病変に対する治療手技が放映された。分岐部病変に対しての薬剤溶出性ステントの使用法に関しては、未だ統一した見解が得られておらず、ク

\*群馬県立心臓血管センター循環器内科

ラッシュテクニック, Y-ステント, T-ステント, Vステント等, 薬剤溶出性ステント導入に伴い様々な手法が検討されている状況であり, その点に関する活発なディスカッションも聞かれた. また, 従来の血管内超音波 (IVUS) に加えて今回のライブでは VH<sup>TM</sup> IVUS System が頻回に使用され, 従来の IVUS との比較, 所見の解釈に関してのディスカッションがなされた. その画像の解釈, 信頼性等に関しては現段階では, 更なる研究の余地が多いように感じられたが, 今後, IVUS 以上に有用性の高い診断デバイスとして期待できると思われる.

現在, 日本各地で盛んに PCI が施行され, その数はアメリカに次いで世界二番目であるという. 種々のデバイスの開発, 改良, 先人の努力によ

る技術の進歩により PCI は飛躍的に進歩した. さらに, 薬剤溶出性ステントの登場により, 我々は PCI の最大の Achilles 腱である “再狭窄” を克服しようとしている. また, ARTS-II においてはバイパス手術より良好な予後が示され, 今後さらなる適応の拡大が見込まれる. おそらく, 20 年前のインターベンショニスト達が夢見た状況に非常に近づきつつあるものと思われる. しかしながら, 薬剤溶出性ステントに対する抗血小板療法, 遅発性血栓性閉塞, 長期予後, 更には医療経済, 認定医制度の問題など, 未解決の問題も少なくない. そうした意味で今回, 一色会長が掲げられた “原点に戻る” というメインテーマは日常臨床の場において PCI を施行する我々に向けての, 非常に大切なメッセージであったと思われる.